

説教題：「**主がお入り用なのです**」

聖書箇所：ゼカリヤ書9章9-10節（1489頁）、ルカによる福音書19章28 - 44節（147頁）

説教者：秀島牧師 招詞：讚美歌93 - 1 - 26 交読詩編：詩編104編13 - 24節（113頁）

讚美歌：83/578（平和を求めよう）/507（主に従うことは）/579（主を仰ぎ見れば）/  
27

「今週の聖句」〔…まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほ  
どいて、引いて来なさい。…「主がお入り用なのです」と言いなさい。〕（ルカ伝19：30-31）

「牧師室の窓」 「信教の自由を守る日忘れじな叔父十八に靖国に入(いる)」

「如月の雪深けれど大地との接する底は春来るを知る」

(1)皆様おはようございます。2月も中旬に入りました。暦の二十四節気では明後日の2月18日は  
雨水(うすい)と言いまして、雪や氷が溶けだし、降る雪が雨に変わる頃になります。私が若い頃  
に過ごしました北海道では、2月中旬では、空も大地も海も冬そのものでしたが、青空の時には春  
が近いことを肌で感じることができました。積もった雪が解けるのは、表面だけではなく、地面  
に接している大地の熱が、目に見えない所で雪を溶かしています。地球は動き、季節は変化して  
いる、人間も動植物も季節の恵みを受けて生きることが実感できます。神の存在が体感でき  
ます。

先程、皆様と共に詩編104編13節～24節を共に読みました。14節には〔(主は)さまざまな草木を  
生えさせられる。〕19節〔主は月を造って季節を定められた。太陽は沈む時を知っている。〕22  
節23節〔太陽が輝き昇ると…人は仕事に出かけ、夕べになるまで働く。〕詩編を読みますと、2  
千年、3千年前の人々も、現在に生きる私たちも変わらないことが良く分かります。一言で言え  
ば、人間は神によって生かされている、命を大切に精一杯に生きることが大切であります。

(2)本日の聖書箇所は、イエス・キリストのご生涯の最期の1週間の始めの日の出来事が書かれて  
います。復活日・イースター（今年は4月20日です）、そのイースターの1週間前の日曜日を教会  
では「棕櫚(しゅろ)の主日」と呼んでいます。棕櫚とは植物のナツメヤシで、細長い葉が広がり、  
大きな扇形をしており、葉を編んでかごやゴザを作ります。戦争に勝って凱行進する軍隊を迎え  
る時にこの細長い葉を振りかざして祝ったとされています。本日の箇所はマタイ・マルコ・ヨハ  
ネの各福音書に並行記事として書かれており、ヨハネ伝には人々が〔(ヨハネ伝12:13)ナツメヤシ  
の枝を持って迎えに出た。〕と書かれています。ルカ伝では36節に〔(19:36)イエスが進んで行か  
れると、人々は自分の服を道に敷いた。〕と書かれており、ローマ帝国の圧政に苦しんでいた  
人々はイエス様をユダヤ人の王と期待して迎えたのでした。イエス様は最期の1週間をエルサレム  
で活動し、最後の晩餐、十字架での死、そして、復活をされました。

(3)きょうの聖書箇所は28節から始まります。〔(ルカ伝19:28)イエスはこのように話してから、  
先に立って進み、エルサレムに上って行かれた。(19:29)そして、「オリーブ畑」と呼ばれる山の  
ふもとにあるベトファゲとベタニアに近づいたとき、二人の弟子を使いに出そうとして、(19:30)  
言われた。「向こうの村へ行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばのつ  
ないであるのが見つかる。それをほどいて、引いて来なさい。〕

28節に「イエスはこのように話してから」とは、先週お話ししました「ムナの譬え話」です。ム  
ナとはお金の単位で、100日間働いて得られる賃金に見合った金額です。イエス様のムナの譬え  
話をご主人様が旅行で不在中に一人ひとりに割り当てられた1ムナのお金をどれだけ増やしたか、  
その結果を、旅行から帰られたご主人様が評価する物語になっています。10倍に増やした者や5  
倍に増やした者には〔ルカ伝(19:17)良い僕だ。よくやった。お前はごく小さな事に忠実だった…〕

と褒めて、沢山の褒美を与えています。この譬え話はお金を稼ぐ・増やすことが人々には理解しやすい様になっています。併し、イエス様が本当に語り掛けていることは、神の言葉を、神が望んでおられることを夫々の人生の中でどの様に理解し、生きて行くかであります。ムナの譬え話をお金のことだと理解すると、一生懸命に働き、お金を稼いで、ご褒美もいただいて良かったですね。頑張りましょう、になってしまいます。併し、事の本質は、そうではありません。誰もが神から才能を、生きる命を等しく与えられることであり、その才能や命を人生の中でどの様に生かすのか、育てるのかと言う譬え話であります。私たちは物事を表面的に理解しがちですが、聖書の御言葉は奥が深く味わい深いです。

(4) ムナの譬え話はエリコの町での出来事でした。エリコからエルサレムまでは約20kmの道のり、標高800mのエルサレムまでは上り坂です。エルサレムまであと3kmのベタニアの村にまで来ました。皆様のお手元の聖書に地図が組み込まれています。聖書の一番後ろに地図帳があり、番号が1から10までのうちの、6番目です。6「新約時代のパレスチナ」と書かれているページです。地図の下の方に縦に細長い湖「死海」があります。死海の左側に黒丸3つが横並びになっています。エルサレム・ベトファゲ・ベタニアと書かれています。今日の聖書箇所30節に書かれている「向こうの村」とはベトファゲの村です。

その村には「まだだれも乗ったことのないろばのつないであるのが見つかる。それをほどこいて、引いて来なさい。」とイエス様は「二人の弟子」に言いました。「ろば」は私たちにはあまり馴染みがありませんが、中近東では身近な動物です。TVニュースで毎日のように報道されている中東ガザでの戦争映像には、ろばが荷車を引いているのが映っています。ろばは我慢強く、粗食に耐える家畜として知られています。

イエス様が「ろばのつないであるのが見つかる」と言うのは、現代風に言えば、駐車場にレンタカーが置いてあるということになりましょう。エルサレムの町は城壁で囲まれており、石垣の門（出入口の門）が幾つかあり、歩いてではなく、驢馬(ろば)に乗って行くことを希望されたのです。何故ならば、その理由は、旧約聖書のゼカリヤ書、先程、司式者に朗読して頂きましたゼカリヤ書9章の9節10節です。〔(ゼカリヤ書9:9)娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗って来る／雌(め)ろばの子であるろばに乗って。〕と書かれています。

(5) イエス様はご自身の役割を理解されているのです。十字架の死と復活により人々の苦しみを解き放たれることです。それは武力・軍力ではないことが次のゼカリヤ書9章10節に明記されています。〔(ゼカリヤ書9:10)わたしはエフライムから戦車を／エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ／諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ／大河から地の果てにまで及ぶ。〕よく見てみましょう。9節に書かれているのは「彼は神に従って得られた、勝利」です。ですから、10節には「戦車を…軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ／諸国の民に平和が告げられる」となっています。人々が考える勝利とは全く正反対の「平和」が示されています。その平和を告げる人は9節に書かれている様に「ろばに乗って来る／雌(め)ろばの子であるろばに乗って」来るのです。ここには平和とは何か記されています。現代社会は、直近の地球上の世界を見ますと、武器による戦争が、加えて、関税引き上げによる経済戦争が予想されています。複雑な国際政治の中にあっても、キリストの教会が、仏教やイスラム教の人々と声を合わせ、手を携えて、平和を実現しなければならないのです。

(6) 話を先に進めます。33節34節を見てみましょう。〔(19:33)ろばの子をほどこいていると、その持ち主たちが、「なぜ、ろばをほどくのか」と言った。(19:34)二人は、「主がお入り用なのです」と言った。〕二人の弟子は、先程の現代風な理解であれば、隣村のレンタカーの駐車場に

行き、「ろばの子」を借りる理由を、イエス様から命じられた言葉通りに、驢馬(ろば)の所有者に話したのです。「主がお入り用なのです」でも、不思議ですね。驢馬(ろば)の所有者は何故、その言葉に応じてろばの子を貸したのでしょうか。或いは、その時の受け答えが書かれてはいないのでしょうか。その理由を推測してみると、

1つには、使用料金を支払ったから。

2つには、書き留める必要はなかったから。

3つには、読者である私たちの想像に任せる意図があったのではないかと私は思います。

ルカによる福音書第2章にイエス様ご誕生の後に両親のヨセフ・マリアはエルサレムの神殿にお宮参りをします。その時に、シメオンと言う老人とアンナと言う84歳の預言者がイエス様との面会を待ち望んでいたのです。聖書には〔(ルカ伝2:30)わたしはこの目であなたの救いを見た…(2:38)エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に…〕と書かれています。

「主がお入り用なのです」と言われた驢馬(ろば)の所有者はこのシメオンやアンナの様な理解をしたのではないかと私は想像しています。

(7)では、「主がお入り用なのです」とはどのような意味なのでしょう。

1つには、「ろばの子」と言う、動物・物体・生命を主が必要とされている、と事実を伝えているのです。

2つには、驢馬(ろば)の所有者に対して、あなたはどの様に対処するのか、答えるのか、と相手の反応を問い掛けているのです。私たちが驢馬(ろば)の所有者であったならばどの様に対応しますでしょうか。使用料を払ってくれば、「ろばの子」貸すことに同意をすることで終了でしょうか。

3つには、「ろばの子」が物体ではなく、私たちの時間や人生そのものである場合には如何でしょうか。

私たちは人生の節目節目で、或いは、予想もしない時に、「主がお入り用なのです」との問い掛けに出会うときがあります。その時にはそうだと分からなくても、後で振り返った時に、あれは主からの呼び掛けであったと気付くことがあります。そのことに気付くのは、聖書の御言葉の手助け、応援があればこそと思うのは大切であると思います。仏教でも御仏の導きと言います。仏教のことはさておきまして、「主がお入り用なのです」との御言葉に私たちが出来ることは誠実に生きることであります。主の呼び掛けに誠実に応えて参りたいと思います。

ここまでは本日の聖書箇所の前半について考えてきました。後半部分には、エルサレムの町が崩壊することが預言されています。イエス様の十字架の死と復活の後に初代教会が出来ます。一方、ローマ帝国の支配を嫌うユダヤ人はローマ帝国との間に反乱戦争を行ない、エルサレム神殿は徹底的に破壊されてしまいます。破壊をまぬかれた僅かな場所(神殿の西壁)が「嘆きの壁」として現在もユダヤ教の大切な場所とになっています。

・・・本日の聖書箇所は「棕櫚の主日」として、イエス様のご生涯の最期の1週間の始まりの場面です。今年の復活日・イースターである4月20日に向けて、生活を整えて参りましょう。

・・・お祈りします。

主なるキリストの神様。2月の中旬を迎えて、梅の開花が伝えられ、春が近い時期になりつつあります。一方では、大雪が降り困っている地域が多くあります。夫々の地域の人々の生活をお守りください。夫々の地域での教会の祈りをお聞き届けください。

中東での戦争で困難な状態にある人々の生活が復興できますように、ウクライナでの3年も続く戦争が、地球上の各地での戦争が終結し、人々が生活できますようにお導きください。

国際政治は混沌としていますが、平和実現のために働いている様々な人々をお守りくださいますように。私たちも出来ることをして参りたいと願っています。教会に連なる一人ひとりに、地域で生活している、働いている一人ひとりに、主なる神の御恵みと平安がありますように。イエス・キリストの御名によって祈ります。 **アーメン**

〔新共同訳(ゼカリヤ書9:9)娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗って来る／雌ろばの子であるろばに乗って。(9:10)わたしはエフライムから戦車を／エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ／諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ／大河から地の果てにまで及ぶ。〕

〔新共同訳(ルカ伝19:28)イエスはこのように話してから、先に立って進み、エルサレムに上って行かれた。(19:29)そして、「オリーブ畑」と呼ばれる山のふもとにあるベトファゲとベタニアに近づいたとき、二人の弟子を使いに出そうとして、(19:30)言われた。「向こうの村へ行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどこいて、引いて来なさい。(19:31)もし、だれかが、『なぜほどこくのか』と尋ねたら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。」(19:32)使いに出された者たちが出かけて行くと、言われたとおりであった。(19:33)ろばの子をほどこいていると、その持ち主たちが、「なぜ、子ろばをほどこくのか」と言った。(19:34)二人は、「主がお入り用なのです」と言った。(19:35)そして、子ろばをイエスのところに引いて来て、その上に自分の服をかけ、イエスをお乗せした。(19:36)イエスが進んで行かれると、人々は自分の服を道に敷いた。(19:37)イエスがオリーブ山(ゼカリヤ書14:4/1494頁：その日、主は御足をもってエルサレムの東にあるオリーブ山の上に立たれる。)の下り坂にさしかかれたとき、弟子の群れはこぞって、自分の見たあらゆる奇跡(金銭欲の強い徴税人ザアカイの改心)のことで喜び、声高らかに神を賛美し始めた。(19:38)「主の名によって来られる方、王に、／祝福があるように(詩編118:26)。天には平和、／いと高きところには栄光(ルカ伝2:14)。」(19:39)すると、ファリサイ派のある人々が、群衆の中からイエスに向かって、「先生、お弟子たちを叱ってください」と言った。(19:40)イエスはお答えになった。「言うておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫びだす(ハバクク書2:11/創世記4:10)」(19:41)エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、(19:42)言われた。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない。(19:43)やがて時が来て、敵が周りに堡壘を築き、お前を取り巻いて四方から攻め寄せ、(19:44)お前とそこにいるお前の子らを地にたたきつけ、お前の中の石を残らず崩してしまうだろう(西暦70年、ローマ軍による徹底的なエルサレム陥落・破壊)。それは、神の訪れてくださる時をわきまえなかったからである。」〕